

〔内藤戊申〕

古代の蒙古

支那歴史地理叢書第五

内田 吟 風 著

古代の蒙古といへば、だれしも元朝蒙古の勃興期をおもふであらう。しかし、こゝにいふ古代蒙古は、蒙古の地に歴史の光がさしそめてから、匈奴の興起、崩壞までをとりあつてゐる。これには蒙古の歴史を單なる民族の交替とせず、現代蒙古民族に至るまでの一貫した傳統と統一ある歴史をみる著者の根本的態度がみとめられる。これは蒙古史研究にとつてひとつの前進である。

ばらばらの民族交替史から一貫した蒙古史の確立、こゝには沙漠と草原とに生をえた游牧民文化の必然性、その發展の自律性に對するふかい同情がある。これはいままで、從屬的にしかみななかつた蒙古の民族興亡を支那史料による塞外史的觀察を破棄したものである。つまり蒙古史研究における二重の前進、すくなくともその試みであるといへよう。

著者は支那最古の文獻である殷墟の甲骨文について、游牧民文化の發祥をかんがへ、網石器とか土器の考古學的遺物について、その活動のありさまをのべ、『穆天子傳』を穆王の蒙古横斷記とみて、前十世紀頃の蒙古の状態をとき、ついで一轉してたゞちに匈奴の勃興期、さらにその全盛期、崩壞期におよんでゐる。この匈奴時代は古代蒙古のもつとも華々しい時代であるとともに、また

本書の主要なる部分をなすものであつて、その政治史をととき、その文化交流をととき、その言語風俗をとくうちに著者多年の蘊蓄がうかゞはれる。

その間、著者は古文獻のみならず、支那古銅器、綏遠青銅器、ノインウラ遺物、トルキスタン出土品等近時發見された諸種の遺物遺跡等をとりいれ、つとめて豊富なる内容をあたへることに苦心してゐられるのは、特に本書のためにこゝろみられた新しい意圖であるらしい。とにかく綜合的な古代蒙古史として、まつたく新しい觀點にたつてゐる上に、論斷また獨創的であつて、單なる啓蒙的述作ではない。わたくしとしては、一二考古學的遺物の解釋において異論を有するものがあるけれども、それは決して本書の價値を左右するものでもないとおもふ。(四六版、本文一五九、附録二五頁、圖版四、地圖一、昭和十五年四月、富山房發行、壺四貳拾錢)(水野清一)

蒙古の祕史

小林高四郎 譯註

翻譯といふものは至難な業である。局部的詳細に拘ればとかく譯文が生硬に陥る。譯文を整へてもなほ且原文の持つニュアンスを如何に漂はすかの問題が残る。畢竟翻譯にはすべてを復原することは望み得べくもない期待であらう。其は唯原語を通じてのみ許さるゝ特權でなければならぬ。

従つて翻譯を志す者には、何よりも先づその限定を持つことが

必要である。しかしこの限定なるものは、勿論譯者の選擇圈内に屬するものであるといふことは一應認められるとしても、而も其が全然譯者の恣意的な判斷にのみ委ねられてはならない。原文の具へる性質は自ら之に或種の制約を加へるであらう。

“Monggol-un niyuca tobšaran” 漢譯(し)「元朝秘史」は、前のオルホン碑文、後の滿洲老檔と共に、北方塞外人の残した三大金字塔の一つである。其は英雄詩であり、時代記であり、傳記である。モンゲゴル文學の初頭を飾る作品であると同時に、モンゲゴル部の歴史的黎明を告げる史料でもある。この點、本書の翻譯には採らるべき立場は必しも單一とは限らない。これ那珂博士不朽の勞作「成吉思汗實錄」の外に、今回小林氏による新しい譯書「蒙古の秘史」の生れた所以である。

那珂博士の翻譯は、その詳細な書誌學的解説と該博な歴史的註釋が示す如く、純然たる史料としての秘史を取扱はれたものである。史料といつても特に古代モンゲゴル人の生活記録として、又チンゲギス・ハーンの事蹟を汲み出すべき唯一の源泉としての秘史は、従つてそこに醸し出された古代的雰圍氣とその内容の逐語的正確とが忠實に轉寫されねばならない。「成吉思汗實錄」中にも「見受けられる日本語として不自然な表現も、一にかゝつてこの用意の表はれにすぎないといふことを悟る時、吾々は「解し得らる、丈は譯し、解せられざる者は敢てごまかさず。原語をそのままに擧げたり」と云はれた博士の言葉に、一人その明確な翻譯態度を感じ敬服せざるを得ない。

さて小林氏の翻譯であるが、氏は人も知る少壯蒙古學研究者、唯に史學のみならず言語に於ても其の眞摯な研究は幾多のアルバイトとして已に世に問はれたところである。その氏が今回改めて秘史の翻譯を出されたについては、固より確乎たる立場に立つてのこと、推察し、同學の一人として慶祝にたへない。

吾々は本書に於て、あく迄も蒙古研究者としての氏の學問的熱意を充分に感ずるものである。しかしながら唯其丈がすべてではないことをも同時に知らねばならない。氏には「一讀理解しやすい、」又「いかなる内容のものであるかを一般人士に理解してもらふ」ものとしての狙ひが在つたのである。この點を吾々は見落してはならない。譯者のこの意圖は、その謙遜な序文にも拘らず、見事成功したと云ひうるであらう。學術的なること、教養的なること、の間に存する技術上の困難は、本譯書に於ても未だ完全には解決されたと云へぬとしても、しかし其は、今後とも本書の研究を続けたいと思つて居られる氏の將來に充分期待し得べき所である。

那珂博士の翻譯がかつて、我國に於る蒙古史研究の發端として偉大なる役割を演じた如く、本書は將來我國の蒙古に關する一般の關心と智識とに對して重大な貢獻をなすであらう。元朝秘史の研究に對しても亦、何らかの形に於て新しい出發點を與へることを期待するものである。(菊判、三一七頁、生活社發行、定價五四式拾錢)(愛宕松男)